

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU

No. 82 March 2013

CONTENTS

On Acquisition of the Psychological Notion of “Percept” in Japanese Modern
Literature in the Meiji era

Mika BABA 1

The Department of Comparative Culture
The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
2013

「知覚」の心理学と日本近代文学（明治編）

馬場 美佳

・要旨

一九世紀に登場し二〇世紀にかけて発展した欧米の生理学的な心理学は、日本の近代文学に多大な影響を与えてきた。とくに写実志向との関連から「知覚」という概念の受容が、文学の主題・表現を根本的に変質、変容させている。明治期については、哲学的な心理学から自然科学的な心理学への移行の影響が如実にあらわれ、そのなかで人間を複雑な心理学的諸要素によって描く作品が模索された。

・キーワード

心理学、知覚、須藤南翠、北村透谷、尾崎紅葉、夏目漱石、谷崎潤一郎、北原白秋、森鷗外、有島武郎

はじめに

一九世紀末の明治中期に、小説の近代化を説いた坪内逍遙は、『小説神髓』（一八八五・明治一八年）に「小説の主脳は人情な

り、世態風俗これに次ぐ」と記し、とくにこの「人情」について「心理学の道理」に基づき描くべきとした。『小説神髓』を批判したものとしてよく知られる二葉亭四迷の『小説総論』（『中央学術雑誌』一八八六・明治一九年四月）をはじめとして、逍遙の心理学を重視する主張に、否を唱えたものは管見の限り見当たらない。そしてその後も心理学は、二〇世紀の文学と不即不離の関係を築いていったといえる。

一九世紀に *Philosophy*（哲学）から分岐した *Psychology*（心理学）が、学問領域として確立したのは、ライプチヒ大学に心理学実験室を設立したW・ヴントが、心理学を学ぶ公的なカリキュラムを整備した一八七九（明治一二）年とされる。ヴントより前に同大に在職していた哲学者にして心理学者のG・フェヒナーは、すでに『精神物理学綱要』（一八六〇年）において、精神と肉体の関係を実験や測定により明らかにすることを主張しており、実験心理学の祖ともいわれていた。まさに心理学は自然科学の領域にある生理学・物理学へと接近し、人間を物理的な対象とみなす研究を押し進めていた。逍遙が『小説神髓』

を執筆していた頃、日本にもたらされていた心理学は、J・ヘヴン、A・ペインのものであり、日本初の本格的な心理学書『心理学』（一八七五―七六・明治八―九年 文部省）は、アメリカで教科書として用いられていたヘヴンの『知・情・意を含む精神哲学』（*Mental Philosophy Including Intellect, Sensibility, and Will* 1860）を西周が訳したものであった。これらは自然科学の物理法則を意識したものではあったが、まだ実験心理学が主流となる前の段階の心理学であった。だが『小説神髓』から数年以内に、先のヴントやアメリカのW・ジェイムズのもとで学んで帰朝した学者たちが、教育や翻訳で活躍し、二〇世紀に入ってから最新の心理学がほぼリアルタイムに移入されていくようになる。

日本は、立て続けに心理学の新しい学説に接するようになるわけだが、その理解の際のポイントとなる概念のひとつが「知覚」である。本研究は、この心理学用語としての「知覚」が、心理学説ごとに定義を少しずつ変えながらも広まっていく様相を捉えつつ、それが文学の内容や表現にどのような可能性を切り拓いたかという観点から考察するものである。今回は、主に明治期について叙述する。（引用文中の傍線および「」内の補足はすべて論者によるものである。また送り仮名も適宜補っている。）

一、「感覚」を「知覚」する―連合心理学の移入

欧米の研究書の紹介・翻訳によって心理学の受容が行われるようになる明治前期から中期にかけては、漢語として用いられていた「知覚」の語意が、しだいに心理学用語のそれへと変容していく時期となる。当初は対応する原語が複数ある状況があったが、次第に *perception* が優勢になり、「知覚」の原語として定着しはじめるのが一八八〇年代半ば、明治一〇年代末からである。訳語が安定していく背景には、心理学において「感覚」と「知覚」を区別し、同時に連動するものとして結びつけ、比較されはじめたことが大きかったものと考えられる。以下にこの変化を心理学書等にそくして概観していくが、その前に、「知覚」の心理学用語化の歴史についてはすでに国語学分野の蓄積があるので、まずはそちらを参照しておきたい。

『日本国語大辞典』（第二版、二〇〇一年 小学館）の「知覚」の語誌には次のように記述されている。

（1）漢籍での本来の意味は、①「知りさとること。知り感 じること。」で心が外界の事物を認識することであるが、日本では多く仏書で②「思慮分別をもつて知ること。心で外界の事物を認識する働き。」の意に用いられた。

（2）「蘭語訳選」（一八一〇）では *gaveel* 「感覚・感情・意識」の訳語に用い、③「感覚器官を通して外部の物事を判別し、意識すること。また、そのはたらき。」の挙例「遁

花秘訣」（一八二〇）も感覚器官の働きを指しているから、「感覚」の意を派生したのは近世のことと思われる。以後、明治初期まで *feel, feeling, sense, sensation* の訳語として多く使われた。

(3) 明治初期に、西周「哲学断片」（一八七〇～七一）〔明治三十四年）など *perception* の訳語に用いられ、明治後期以後、この意味用法が定着した。

漢籍由来の「知覚」は、仏書・蘭書由来の意味を経由し、西洋心理学用語としての意味へと移行していったという。本研究の目的は、(3) の自然科学由来の心理学用語である「知覚」が、(1)(2) を含意している様も考慮しつつ、文学にどのような作品をもたらしたのかを考察していくことにある。そこでまずは、「知覚」と *perception* が対応する概念として安定していくまでの辞書・術語集・心理学書に、どのような定義がみられたかを概観していく。

J・C・ヘボンによる幕末の和英辞書『和英語林集成』（一八六七・慶応三年）の「Chikaku チカク 知覚 (oboe)」の項には、「Feeling; sensation; sinke no chikaku wa don ni naru 〔神経の知覚は鈍になる〕, the sensibility of the nerves is blunted」とあり、『日本国語大辞典』語誌の(2)「感覚」の意で用いられている。だが、一八八〇年頃、明治一〇年代半ばまでの字引・読本では大半に「知り覚え」の意とあり、先の『日本国語大辞典』語誌(1)の意が優勢であったことがうかがえる。

先にもふれたアメリカの哲学者ヘヴンが著し、西周が訳した『心理学』は、自然科学的傾向よりも哲学的傾向が強いこともあって、「知覚」という項目が見られない。

その後、日本に、自然科学寄りの心理学として最初に深く影響を与えるのはイギリスの連合学派、A・ペイン、H・スペンサー、J・サリーである。経験論をベースに、心理を観念の連合としてとらえる立場を取る。まずスコットランド出身のペイン著、そして井上哲次郎訳、大槻文彦校訂の『倍因氏 心理新説』（一八八二・明治一五年 青木輔清刊、*Mental science* 1868）では、*perception* を「知覚力」とし、「感覚」と云ふは単に外物の為に五官に生じたる結果なれども、知覚力は心の外なる某物より来りたる者を認識するの力なり」とし、「感覚」と「知覚」を対比的に結びつけ、比較による説明を行っている。そして「知覚」は脳に蓄積された「経験」と「記憶」とにより成り立つものとして理解される。この頃から各心理学書において「知覚」「知覚力」が *perception* の訳語として優勢になっていく。なお、一八七八（明治一二年）年には、東京大学の各学部で科目「心理学」を担当していた外山正一が、すでにペインの原書を教科書として採用しており（『法理文学部第七年報』）、翌年の講義内容に「意志」「記憶」「想像」とともに「知覚並びに性情思想の作用」が見られ（同『第八年報』）、一八八一（明治一四）年には、「精神と身体の関係」とともに「知覚」について教授されていたことがうかがえる（『東京大学第二年報』）。

明治二〇年代（一八八七―一九六六）に、帝国大学や高等師範学校をはじめ、広く教科書として採用されたのは、イギリスのサリーが著した *Outlines of Psychology* (1884) であり、なかでも外山の教え子である有賀長雄が訳し、かつサリー以外の諸説も加えた『教育適用 心理学』（一八八六・明治一九年九月 牧野書房）が多く用いられた。これは原題に *psychology* が付いた書の最初の翻訳でもあるという。第七章「知覚力 *perception*」の「感覚力と知覚力との関係」の節では、「感覚」「知覚」の二語は、世人の往往混同する所なれば、先ず其の差別を説くこと緊要なり」とし、「感覚を処詰 [*Localization* ≡ 局所に制限] して之を実物に帰するの作用を知覚と云ふ」とあるように、やはり二種の違いとその連動から説いている。さらに注目したいのは、自然科学的心理学の用語として誕生した *percept* の説明がなされていることである。

人の一物を知覚するは、必ずその受けし所の感覚を実物に帰するの作用に出でざるは無し。この作用の結果、即ち之によつて生じたる心状を知覚識 (*percept*) と曰ふ。

されば知覚力の作用は、感覚の作用に比すれば心意（即ち大腦）の発作に係ること更に深き者たるを知るべし。感覚に在ては心意は主として所動即ち受動の位置に立つに反して、知覚に至りては常に感覚の注意して弁異し統同するのみならず（是れ皆発動の作用なり）又受くる所の印象より推して之に依て知るべき外界の実物に達せんとせり。

ここである「知覚」の作用の結果としての「知覚識 (*percept*)」とは、現在の心理学で「知覚表象」といわれるものに近いが、それとは根本的に違う点がある。「知覚」が、「感覚」を直接受用して外界を理解するプロセスとみなされていた点で大きく異なるのである。同書は「感覚あれば必ず知覚ある事」とも主張しており、この前提において、詳しく「知覚作用」のプロセスを分解して解説している。それによれば、「知覚識」は、「現在の感覚」と「過去の感覚」とを「元素」にした「複雑なる心状」であり、さらにはそれらを「聚合」させる作用、すなわち触覚や視覚の過去の経験を蘇らせ「復現」することであるという。そしてスペンサーの「知覚」の定義である「直現的再現作用 (*Presentative-Representative Process*)」を紹介し、「感覚の元素」と、「復現の元素」＝「心像 (*Mental Picture*)」を包含するものであるとしている。かくして「知覚」とは、

心意の先づ（或は単純に、或は複雑なる）感官印象を弁異統同し、さて之を補成するに蘇起感覚を以てするの作用にして、其の現在並びに蘇起の感覚を統結し、以て一個の知覚識即ち今現に虚空の或る部分に存する物体の（恰も斯かる作用を経ずして直に得たる所たるが如き）認得即ち認識と為す者なり

というように「感覚」を統合し、その由来するところを認識するものとして定義される。

この *percept* だが、『オックスフォード英語辞典』によれば、

これこそが心理学を象徴する用語として誕生したものであったことがわかる。perception あるいは perceive は日本語の「知覚（する）」と同様に、心理学以前から用いられ、その意味は『日本国語大辞典』語誌の(1)と(2)に同じであった (the ability to see, hear, or become aware of something through the senses. / the way in which something is regarded, understood, or interpreted)。そして一九世紀に半ばに、心理学的な意味 (the neurophysiological processes, including memory, by which an organism becomes aware of interprets external stimuli. 「外的刺激が何であるかという、記憶を含めた神経生理学的なプロセス」) が加わる。その上で新たに生み出された概念が、percept (an object of perception: a mental concept that is developed as a consequence of the process of perception) であり、訳せば、「知覚表象。すなわち知覚のプロセスの結果として発展する精神概念」だったのである。

L・ダントン著、西村正三郎訳『心理学之応用』（尚友会叢書 一八八七—一九〇三年 普及社）の第十九章「知覚力の種類」に、「かつては感覚と知覚との差はとわなかつた」と紹介されており、この区別が心理学の発展上、いかに画期的な発見であったかがうかがえる。バインの心理学書の翻訳にも関わっていた大槻文彦による近代的国語辞書『言海』（二八八九—一九一四年 自費刊行）の「知覚」の項には、二種の意味があげられており、「①知り覚ルコト。②耳目等ノ五官ニ、外物ノ触ルルヲ感じテ知ルコト。」と、「感

覚」と「知覚」の区別を明らかに意識した説明を行っている。

やはり外山の教え子の一人であり明治二〇年代を代表する哲学者・井上円了の『心理摘要』（一八九一・明治二十四年三月 哲学書院）の第五章「感覚相集りて知覚を生ずる。知覚は智力の初級なり」の項では、「感覚」と「知覚」の区別について、「感覚は単純にして知覚は複雑」、「感覚は外物の刺激に感応するのみにて之を一個の物体として認識することなく、知覚は外物の地位を認定し之を一物として識了するなり」とし、「感覚」は受動的にして再現作用少なく、「知覚」は能動的にして再現作用が多いとみなす。単純な「感覚」よりも複雑な「知覚」を優位におく進化論的な説明がみられる。そして「触視」の二種を「知覚」に密接な感覚要素として重視する。「感覚」と「知覚」という全体性を持つものを分節化し、その違いに注目することによって、とくに後者が「智力の初級」と位置づけられ「心」の重要な働きとして、「知覚力」と名付けられている。

ちなみに、この「知覚力」は、いち早く教育学の領域で重視されていた。能勢栄説『ヘルバルト主義の教育説』（一八九三・明治二十六年二月 鹿島新太郎刊）では、この教育説の主眼は「知覚・類化」にあり、「知覚」が有効なのは「感覚」されるものではなく、「心中」で消化し、知識をひろめるに至る「自覚すること」にあるという。こうして「知覚」は「感覚」よりも上位に位置づけられ、知的人間にとって修練し蓄積すべき能力の第一となる。このヘルバルト派の教育学説浸透には、帝大に

一八八七から八九（明治二〇―二二）年に在籍し特約生教育学科で教鞭をとったE・ハウス・スネヒトの影響が大きい。なお、これまで見てきたように、心理学の普及にはほとんどお雇い外国人教師の影響が見られない。

アメリカ経由の欧米哲学系心理学から、イギリスの連合学派系の心理学へという展開を追って、最新の心理学説の紹介が積極的に行われはじめた時期に、「心理学の道理」に基づいて描くことをめざし、小説を主軸に新しく生まれ変わろうとしていた文学にも、さほど多くはないとはいえ、「知覚」という言葉があらわれはじめるようになる。以下、具体的に「知覚」という心理学用語が見られる作について、考察を加えていくことにしたい。

■須藤南翠『処世写真 緑蓑談』（一八八八・明治二十一年 正文堂）

斯く教師の懇篤なる教授を受ける其の中にて主座を占めたる甲の生徒は、記憶といひまた知覚といひ、群生徒中に嶄然と頭角をしも頭はすべき穎才なりとは、問題の中に在りても答弁の聊か渋滞せざるを見て其の優秀を察すべし。（発端）

南翠は、当時改進黨系の新聞において政治小説の書き手として人気を博しており、そのピークが一八八七から八九（明治一九―二二）年であった。本作は、前編部分が一八八七（明治一九）年に『改進黨新聞』に連載された「雨窓漫筆 緑蓑譚」を

増補・改変したもので成り、これに続編を付して刊行された。内容は、当時の改進黨が主張する地方自治の必要を宣伝したもので、主人公の越山卓一がそれに邁進して行く姿を描いている。引用部分である「発端」は、卓一が幼少時に教師から中央集権の弊を学び地方自治の重要さに目覚めていく様子を描いているが、これは新聞連載時には無かった章であった。そも『小説神髓』はプロパガンダとしての政治小説批判の書でもあったわけだが、南翠はいち早く逍遙流の小説改良運動に呼応しようとしていたといえるだろう。本作の語り手は、日本地図について教師が質問し、十三歳の主人公が弁舌淀みなく答える神童ぶりを発揮する場面で、他の生徒と比較して「記憶」と「知覚」とに傑出してゐるとしている。主人公の優秀さが、心理学的、教育学的に保証されているという意味で、当時最新の人間観による造形であるといえよう。

■北村透谷「我牢獄」（『女学雑誌』一八九二・明治二十五年六月）

是の如きもの我牢獄なり、是の如きもの我恋愛なり、世は我に対して害を加へず、我も世に対して害を加へざるに、我は斯く籠囚の身となれり。我は今無言なり、膝を折りて柱に憑（もた）れ、齒を咬み、眼を瞑しつゝあり。知覚我を離れんとす、死の刺（はり）は我が後に來りて機を覗（のぞ）へり。「死」は近づけり、然れどもこの時の死は、生よりもたのしきなり。我が生ける間の「明」よりも、今ま死する際の「薄闇」は我に取り

てありがたし。暗黒！ 暗黒！ 我が行くところは関（あづか）り知らず。死も亦た眠りの一種なるかも、「眠り」ならば夢の一つも見ざる眠りにてあれよ。をさらばなり、をさらばなり。

「我牢獄」の主人公は「もし我にいかなる罪あるかを問はゞ、我は答ふる事を得ざるなり、然れども我は牢獄の中にあり。」と語り始め、己の内なる牢獄のいかに自らを拘束しているか、という苦衷を吐露していく。それは囚われる前の「自由の世」の「記憶」（これを「故郷」と呼ぶ）を思うためであり、また「恋愛」に囚われてさらに「悲恋」のために身動きならず絶望しているためなのである。引用した結末部分は、主人公が死を自覚して以降の心中を描いている。そこに「眼を瞑しつゝ」、「知覚我を離れんとす」とあり、「感覚（視覚）」と「知覚」とを連動させ、それによって「死」へ向かう状況を表現している。興味深いのは、「死する際」で主人公に安らぎを与える独特の「薄闇」という世界が想像されていることだろう。それはまだ経験したことのない「死」の「知覚」ともいえ、その先の「暗黒」を想像しつつも知ることは無いという。「感覚」から「知覚」へというプロセスを意識することによって、人の生における未知の世界が想像され描かれているといえるだろう。そして同じ透谷による次の二つの評論は、「知覚」が人生を考えることと結びついていることが注目される。

■北村透谷「実行的道德」（『聖書之友雑誌』一八九三・明治二六年四月）

人生に満足するの道二つあり、其一は何事にも頓着せずして世を渡ることとなり。其二は知識を以て人生を知覚したる上にて世を渡ることなり。

■北村透谷「日本文学史骨、第一回、快樂と実用、明治文学管見の一」（『評論』一八九三・明治二六年四月）

マシュー・アーノルドは、「人生の批評としての詩に於ては、詩の理、詩の美の定法に依（かな）ふかぎり、人生を慰め、人生を保つことを得るなり」と云へり。

文学が一方に於て、人生を批評するものなることは、余も之を疑はず。然れども、アーノルドの言ふ如く、人生の批評としての詩は又た詩の理と詩の美とを兼ねざるべからず。吾人文学を研究するものは、単に人生の批評のみを事とせずして、詩の理と詩の美とをも究むるにあらざれば不可なるべし。

人生を慰むるといふ事より、*to soothe* なるものが、詩の美に於て、欠くべからざる要素なる事を知るを得べし。人生を保つといふ事より *to live* なるものが、詩の理に於て、欠くべからざる要素なる事を知るべし。真に人生を慰め、真に人生を保つには、真に人生を觀察し、人生を批評するの外に、真に人生を通訳することもなかるべからず。人生を通訳するには、人生を知覚せざるべからず。故に天賦の詩才ある人は、人間の性質を明らかに認識するの要あるなり。然らざれば予

ニアスは真個の狂人のみ、靴屋にもなれず、秘書官にもなれぬ白痴のみ。

人生 (Life) という事は、人間始まつてよりの難問なり、哲学者の夢にも此難問は到底解き尽くす可らずとは、古人も之を言へり。若し夫れ、社界的人生などの事に至りては、或は鋭利なる觀察家の眼睛にて看破し得ることもあるべけれど、人生の *Vitality* に至りては、全能の神の外は全く知るものなかるべし。故に詩人の一生は、黙示の度に従ひて、人生を研究するものにして、感応の度に従ひて、人生を慰保するものなるべし。

同じ時期に発表された評論だが、前者の「知覚」は「知識」に限られてしまっていることから、透谷は否定的に用いている。一方の后者は、「文学が人生に相渉るものなること」を信じる立場から、人生の批評にとどまらぬ、自身のなすべきことについて論じたものであり、山路愛山との人生相渉論争を経て、文学を通して人生を考えることの問題を「詩の美」「詩の理」に求めている透谷の思想がわかる文章である。そして、ここで前提とされているのが、「真に人生を慰め、真に人生を保つ」ことであり、このため「人生」を「知覚」し、「人間の性質」を「認識」という「研究」が必要とされているのである。

いずれの評論でも、言葉そのものの意味としては心理学用語化以前の「知り覚る」と同じだが、問題なのは、両者ともに「人生」とのかかわりのなかで「知覚」が大きな意味をもっている

ことであり、とりわけ後者では、「人生の性質を明らかに認識する」ことの前段階として、「知覚する」ことが求められていることだろう。人生を考える根本として「知覚」が位置づけられており、透谷が、キリスト教的文脈で「人間の生涯は心の経験なり」(「心の経験」『聖書之友雑誌』明治二六年一〇月)というときも、印象として記憶された経験が心意の作用を可能にし「知覚」させるという心理学的プロセスが意識されていたと思われる。文学が、真の人生とは何かというテーマを打ち立てたとき、それが「知覚」する主体そのものを描くことによって表現されようとしていた兆しが見いだせる。ジンセイとは、人生 (Life) にして人性 (human nature) のこととなり、人間の本性あるいは性質という、哲学的にして心理学的、そして文学的な領域にまたがる関心の中心となっていくのである。

■尾崎紅葉「金色夜叉」(『読売新聞』一八九七—一九〇二・明治三〇年一月—三五年五月)

「まあ、那〔あ〕の指環は！一寸、金剛石〔ダイヤモンド〕？」

「然つよ。」

「大きいのねえ。」

「三百円だつて。」

お俊の説明を聞きて彼は漫に身毛の弥立〔よだつ〕を覚えつゝ、

「まあ！ 好いのねえ」

鰯〔じめ〕の目ほどの真珠を附けたる指環をだに、此の幾歳か念懸くれども未だ容易に許されざる娘の胸は、忽ち或事を思ひ浮べて攻め鼓の如く轟けり。彼は惘然として殆ど我を失へる間に、電光の如く隣より伸び来れる猿臂は鼻の前なる一枚の骨牌〔かるた〕を引攫へば、

「あら、貴女如何したのよ。」

お俊は奇立ちて彼の横膝を続けさまに拊〔はた〕きぬ。

「可くつてよ、可くつてよ、以来〔これから〕もう可くつてよ。」

彼は始めて空想の夢を覺まして、及ばざる身の分を諦めたりけれども、「旦金剛石の強き光に焼かれたる心は幾分の知覚を失ひけんやうにて、然しも目覺かりける手腕〔てなみ〕の程も見る見る漸く四途乱〔しどろ〕」になりて、彼は敢無くも此の時よりお俊の為に頼み難なき味方となれり。かくして彼より此に伝へ、甲より乙に通じて、

「金剛石！」

「うむ、金剛石だ。」

「金剛石!!」

「成程金剛石！」

「まあ、金剛石よ。」

「那〔あ〕れが金剛石？」

「見給へ、金剛石。」

「あら、まあ金剛石!!」

「可感〔すばらし〕い金剛石。」

「可恐〔おそろし〕い光るのね、金剛石。」

「二百円の金剛石」(前編一一)

瞬く間に三十余人は相呼び相応じて紳士の富を謳へり。

「金色夜叉」冒頭の正月カルタ会の場面で、間貫一と鳴澤宮の将来を狂わせる大富豪の御曹司・富山唯継が驚くほど大きなダイヤの指輪を嵌めて登場する。実はここで「知覚」が大きな役割を担っている。その場に居合わせた三十人以上の若者たちが「金剛石」に驚き、次々に囁き合うきっかけになっているのが、かるた上手の娘の「知覚力」減退のドラマなのである。彼女が調子良くなるたを取り続けていたところに富山が現れ、その指輪を目にしたとたん、そこから玉の輿を連想したのか「惘然として殆ど我を失へる」状態に陥ってしまうのであり、その衝撃ゆえに、「心」が「金剛石の強き光」に「焼かれて」しまい「幾分の知覚」が喪失してしまう。心中で起こったことのプロセスが語り手によって懇切丁寧に説明されている。すでに見てきたように、「知覚力」とは、受け取った「感覚」が外部の何に由来するかを認識する心性作用であり、とりわけ「心意（即ち大脳）の発作」から強い影響を受けるとされていた（前掲『教育適用 心理学』）。この作の場合、「知覚」が外界を理解するどころか、外界の刺激に麻痺させられて脳が乱れ、その力を減退させてしまったというのであり、このオーバーフローのごとき現象によって、この後、富山という人物が象徴する過剰な刺激が、主人公たちの「知覚」、すなわち彼らの判断、そして人

生を狂わせるといふ未来が暗示されているのである。

以上、イギリス系の連合心理学が主流の時期の特徴は、「知覚」が心理学の用語として浸透していく過程において、旧来の「知り覚え」という知力の意味を内包しつつも、外界からの「感覚」を「知覚」とするという連合・連動のプロセスに注目し、「人情」が描かれている点である。そして同時に、「知覚」が、人生を解き明かす謎として文学のテーマになったことがあげられる。

二、「知覚」という独自の意識―実験心理学の隆盛

一八九〇（明治二三）年、アメリカで精神物理学を学び帰朝した元良勇次郎が、帝国大学に着任し実験心理学の発想をもたらしした。元良はアメリカでヴント系統の学者の一人、ホールに学んでいた。一八九三（明治二六）年には、帝大文科大に専門科目として心理学に関する講座が導入され、専門家の養成が本格化する。元良とともにヴントの著（『心理学概要』一八九八・明治三一年）を訳した中島泰蔵もその一人である。また一九〇〇（明治三三）年には、元良の弟子である松本亦太郎がドイツのヴントのもとで学び帰朝しており、高等師範学校の選択必修科目として「実験心理学」を設置するのに尽力している。東京帝国大学でも一九〇三（明治三六）年には、周到に機材を準備してきた心理学実験室が彼ら子弟の手により完成

し、翌年には哲学科のなかに心理学専修がつくられた。松本は一八九六（明治三九）年に新設された京都帝国大学文科大学の心理学講座教授に就任している。

また、アメリカの近代心理学の祖であり医学・生理学を学んだ心理学者、W・ジェームズもまた同じ時期から積極的に紹介、翻訳されており、先の中島は、一八九一から九二（明治二四―二五）年にかけて、ハーバード大学でジェームズに学んでいた。また、元良の弟子の福来友吉によって、『心理学解説（ゼームズ氏心理学）』（一九〇〇・明治三三年 育成会）、『心理学精義』（一九〇二・明治三五年 同文館 *Psychology, briefer course* 1892）、『教育心理学講義』（一九〇八・明治四一年 弘道館 *Talks to Teachers on Psychology* 1899）が上梓されている（そしてこの福来は千里眼問題の渦中の人となって行くのである）。日本人自身によって最初に積極的に学ばれたのは、ヴントとジェームズであったといえるだろう。

ヴントもジェームズも自然科学としての心理学に存在価値を見いだしている点では同じである。ヴントは、感覚、知覚、感情連想、注意、反応時間等を研究領域とする感覚生理学に基づき、内観（自分の意識を自らが観察すること）を提唱し、表象が意識においてはっきり「知覚」されること（統覚）の過程において、いかなる要素（単一の感覚等）が結合しているかを法則化しようとする構成主義的な心理学であった。一方のジェームズは、心理学をより個人の意識の問題とし、意識を流れとし

て捉え、そこから理解を進めた。末梢神経系の生理的刺激が自覚的な情動の発現に先行するという説（情動の末梢神経説）がよく知られる。大脳や感覚受容器の視点から分析する機能主義的な心理学であり、単一の感覚といった要素は意識には存在しないと主張した。おそらくこの学説が到来したことによって、辞書類において perception が「知覚」の原語として優勢であることにかわりはなかったが、一方で consciousness が追加されるという現象がおこっている。

ジェームズ自身が著した最初の本格的な心理学書は *The Principles of Psychology*（一八九〇・明治二三年）だが、その内容を省略・加筆し教科書として出版されたものを訳したのが福来訳『心理学精義』である。冒頭で心理学を、「意識の状態其物の叙述、並びに説明なり」と定義している。ただし、第十一章「意識流」では、それ以前の多数の研究が採用してきた、「単一なる感覚の観念」を想定し「此等を連合し、分出し、融合して以て心意の高等なる状態を建築する」といった「総合的方法」は危険であると、従来の研究の前提を覆す。その理由は、「心意の高等なる状態は感覚と称する単位より結合して成立するものなりや否やは今日尚未定の疑問に属す。然るに総合的方法は此の未定疑問を根本的基礎として承認するものあり」と、未確認の条件を前提とした議論だからというもので、加えて、この「総合的方法」が「曾て単純感覚を経験したることなく」という状態であるがゆえに、「想像的単純感覚」によってする

はかない限り非科学的であるからだという。「所謂単簡より複雑に進むの主義に適ふものにて、大に教授上の便利を有す」ものであっても、誇張かつ抽象であり錯誤でしかないとし、「人性の全体を研究せんと願ふ読者」は、ぜひ「内部生活に於いて日夜経験して熟知する所の最も具体的なる心的事実」に基づくべきと主張する。かくして、ジェームズは唯一の「根本的事実」として、

何人にも其の内部経験に省みて、自ら確知すべき根本的元始事実意識の進行しつゝ、ありと言ふ事実即ち心意の諸状態が相継続する事実はれなり

という、有名な「意識の流れ」を提示するのである。これまで「知覚」を考える上で前提とされてきた「感覚」にかわり、「意識」が「知覚」の前提となる。

かくして第二十章「知覚」では、「知覚の材料」とは「感覚的脳髓作用と再生的脳髓作用との結合したるものであるとし、「純粹なる感覚は純粹なる感覚として全く一事なり、知覚は知覚として全く他の一事なり、此の両事に対する脳髓的条件は全く別異なり。」と、「知覚」を独自の意識状態とみなす。

以上の見解から、「知覚」の「生理的作用」は、「脳髓は従前の経験によりて踏みならされたる通路によりて反動し、従つて此の通路は吾人をして蓋然的事物の知覚を生ぜしむる事、換言すれば従来の経験に於いて最も多く反動を喚起したる事物を知覚す」と、「感覚」そのものを純粹に「知覚」するのではなく、

一部は「感覚」を通じてくるものだが、大部分は脳がそれ以前に反応を起こした事物を「知覚」せしめることになるのである。ここから、かつて「感覚」の誤謬とされていた「錯覚」は、「知覚」の誤謬として再定義される。そして「妄覚（いわゆる「幻覚」）」については、これまでは「客観的刺激」を欠いている点で「錯覚」と異なり「誤りて外界に投出されたる心像」と説明されてきたが、それこそが誤りであって、「中枢の脳髓作用と該作用を喚起すべき外来刺激との比例が極端に違常となりたる知覚」であり、さらにいえば「妄覚は一つの感覚」という意識を成しているようなものであって、たまたま外界に実際の対象物が無いだけであると、末梢神経と大脳との関係から説いてみせている。

この時期の新しい学説について大切なのは、一般への啓蒙が積極的に行われたことである。つまり作品の書き手ばかりではなく読み手もまた、人間把握の共通の手段として心理学を用いることができるようになっていったと思われる。たとえば東京帝国大学で心理学を学んだ卒業生たちが、元良、松本、福来を顧問として「心理学通俗講話会」を発足させる（一九〇九・明治四二年四月）。これにより新進気鋭の心理学者の話を、学生や教員、家庭の主婦まで幅広く知ることができたのであり、この活動は一九一九（大正八）年頃まで約一〇年続いたという。

自然科学としての心理学が明治三〇年代（一八九七—一九〇六年）をかけて浸透し、日露戦後にはほぼ定着したと思

われる。たとえば徳谷豊之助・松尾勇四郎著、三宅雄二郎校閲『普通術語辞彙』（一九〇五・明治三八年八月 敬文社）に、「知覚」について次のように説明されている。この書も「知覚」の原語を *perception* とし、

知覚と謂ふ語は、古来広義にては事理事物を知る力、即ち知力と同義に用ひ、狭義にては人々が自己の心の種種の作用を内に顧みて感じ知る力と云ふやうに解するものもある、之等の解釈は共に知覚の特別の意義として、今日一般に多くの心理学者又普通の人々に認められてゐる意義は、他の解釈即ち感覚的知覚の意義である

過去の用例を「特殊」とみなし、心理学の用語を「一般」と位置づけ、「知覚」の内実を生理学的なものと密接な、「感覚的知覚」と捉えるようになる。そしてさらにジェームズの「錯覚」「妄覚」の説明がなされている。本書で興味深いところは、末尾に付されている「知覚的」の語釈である。

知覚的とは、知覚の意義を形容語に用ひんが為めの形で「感官に触れたるもの、何たるを弁じ認めたる」と云ふ意味であるが、単に心理学上の意義として用ひざる場合には、感覚に比しては更に精神的なもの、思想や、想像や、思考に較ぶれば、遙かに感覚的即ち非精神的のものであると謂ふ意味を含んでゐる。

ここに、心理学を前提としたあらたなニュアンスを帯びた言葉が認められており、肉体と精神とを結ぶ「知覚」の中間的位

置づけが見出せるのである。

こうして、「感覚」と直結していた「知覚」が、継続した意識としての「知覚」へと変容する。それは「感覚」という刺激を契機としつつも、その刺激がもたらした印象に大腦がどう反応するかが大きな問題になることもあった。これは文学において、「知覚」によって人間を生理学的に描くだけではなく、大腦によって「知覚」させられているという事実が内なる他者を想像する人間を描くことにつながっていったと考えられるのである。

■夏目漱石「草枕」（『新小説』一九〇六・明治三十九年九月）

強ひて説明せよと云はるゝならば、余が心は只春と共に動いて居ると云ひたい。あらゆる春の色、春の風、春の物、春の声を打つて、固めて、仙丹に練り上げて、それを蓬萊の靈液に溶いて、桃源の臼で蒸発せしめた精氣が、知らぬ間に毛孔から染み込んで、心が知覚せぬうちに飽和されて仕舞つたと云ひたい。普通の同化には刺激がある。刺激があればこそ、愉快であらう。余の同化には、何と同化したか不分明であるから、毫も刺激がない。刺激がないから、竊然として名状しがたい楽がある。風に揉まれて上の空なる波を起す、輕薄で騒々しい趣とは違ふ。目に見えぬ幾尋の底を、大陸から大陸まで動いてゐる蒼海の有様と形容する事が出来る。只夫程に活力がない許りだ。然しそこに反つて幸福がある。偉大なる

活力の発現は、此活力がいつか尽き果てるだらうとの懸念が籠る。常の姿にはさう云ふ心配は伴はぬ。常よりは淡きわが心の、今の状態には、わが烈しき力の銷磨しはせぬかとの憂を離れたるのみならず、常の心の可もなく不可もなき凡境をも脱却して居る。淡しとは単に捕え難しと云ふ意味で、弱きに過ぎる虞（おそれ）を含んでは居らぬ。冲融とか澹蕩とか云ふ詩人の語は尤もこの境を切実に言いつたものだらう。

（六）

漱石が、英文学者として心理学に深く関心をもっていたことは知られている。イギリス留学から戻ってからの東京帝国大学での講義内容をまとめた『文学論』（一九〇七・明治四〇年五月 大倉書店）の序には「重に心理学社会学の方面より根本的に文学の活動力を論ずる」とあり、「坑夫」（『朝日新聞』一九〇八・明治四一年一月―五月）はまさにジェームズの「意識の流れ」に想を得た作品であった。

春に感じて詩人の心が動く。このことを「草枕」の主人公は心理学の知見を使って説明してみせる。春の仙境的な精氣が「毛孔から染み込む」と表現されているのは「感覚」的なものだろう。だがこれが「知覚」されずに飽和してしまったとある。いわば大腦が従来の經驗を喚起し知力作用を起こしてしまうような状態ではない。ところが「常の心の可もなく不可もなき凡境を脱却して居る」ことができるという。それを春の仙境的な精氣と「同化」はしているが、「何と同化したか不分明であるから、

毫も刺激がない」ゆえであると説明している。「感覚」も「知覚」も意識の問題としてそれぞれを独自に捉えるジェームズ流の心理学が前提になれば成立しない説明であろう。「知覚」が人生問題を考える上でクローズアップされ、知力を刺激することこそ人生を知ることにつながると考えられていた事態を考えれば、「草枕」の文学のありようは、人生の定義、あるいは人生の考え方そのものに再考をせまる。たとえば、斎藤鹿三郎『教育応用 新心理学』（一九〇三・明治三六年三月 文学社）は、次のように近代人の生き方と「知覚」との関係について説く。

凡て宇宙間の万物は、吾人に向つて終始「吾々は何であるか」と云ふ問題を提出しつつあるなり。而して此の問題に對する決意の答は即ち知覚なり。然るにこの答は人々によりて性質を異にするものなり。従つて知覚は感覚とは其性質を異にし、知力作用により精神が發動的に之を受取るものにして非常に精神の練習を要するものなり。

かくして、「吾々は何であるか」を考え悩む近代日本人にとつて、「知覚」こそが個々を異なる存在にするものであり、鍛え上げ伸ばすべき精神の力として、もつとも重要な位置を与えられるのである。「草枕」が、「知覚」からまぬがれた意識を、詩人のありようの本質だと言うのは、「知覚」を鍛え上げること形で形成される思想や思考の固さ、息苦しさ に比して、それがしなやかな強さをもつことに理想を見いだしているからであろう。「知覚」がはやくから近代日本の教育学の注意を引いてい

たことを思えば、それに基づいた教育の文明化はずいぶん進んでいたといえる。「知覚」させずに飽和させること、刺激や活力がなくても幸福であることの境地こそ、実は得ることが難しい時代になっていたのである。

■谷崎潤一郎「刺青」（『新思潮』一九一〇・明治四三年一月）
「己はお前をほんたうの美しい女にするために、刺青の中へ己の魂をうち込んだのだ、もう今からは日本国中に、お前に優る女は居ない。お前はもう今迄のような臆病な心は持つて居ないのだ。男と云ふ男は、皆なお前の肥料（こやし）になるのだ。……」

其の言葉が通じたか、かすかに、糸のやうな呻き声が女の唇にのぼった。娘は次第々々に知覚を恢復して来た。重く引き入れては、重く引き出す肩息に、蜘蛛の肢は生けるが如く蠕動した。

「苦しからう。体を蜘蛛が抱きしめて居るのだから」

かう云はれて娘は細く無意味な眼を開いた。其の瞳は夕月の光を増すやうに、だんだんと輝いて男の顔に照つた。

「親方、早く私に背の刺青を見せておくれ、お前さんの命を買った代りに、私は嘸（さぞ）美しくなつたらうねえ」

娘の言葉は夢のやうであつたが、しかし其の調子には何処か鋭い力がこもつて居た。

「刺青」の結末近くからの引用である。刺青師・佐吉の美へ

の執念から刺青をほどき、これ氣を失っていた娘は、それまでの
はじらう娘ではなく、まさに背中に彫り込まれた女郎蜘蛛のよ
うな女に変わったのである。その劇的な変化が、ただ目を覚ま
したではなく、「娘は次第々々に知覚を恢復して来た」と語り
手によって報告されている。しかも、この後に開かれた娘の「眼」
は「無意味」と描かれる。この「眼」の表現は、「眼」が何か
を見て、刺激を受け、「知覚」が生まれるという認識にあるも
のではない。逆に、「知覚」の側に変革をきたしているために、
「眼」がまだ何も見ないのである。清吉の芸術的な美・官能的
な美への執着から、激しい刺青の痛みを受けて生まれ変わった
娘が、「お前さんの命を貰った代りに、私は醜美しくなつたら
うねえ」と「鋭い力」をこめて言っているが、この人格にまで
およぶ変貌を大脳の変貌ととらえ、それを「知覚」の死と再生
によって示しているとはいえないだろうか。それは娘が新たな
生／性を生きることの意味してもいるはずである。

この後谷崎は、五官と「知覚」に注目し、多くの官能的な
作品を生みだしていく。なかでも歯痛の激しい熱に浮かさ
れた人間の妄覚（幻覚）を描く「病瘧の幻想」（『中央公論』
一九一六・大正五年）、味覚を扱った「美食倶楽部」（『大阪朝
日新聞』一九一九・大正八年）などは、「知覚」が翻弄される
ドラマになっているものといえる。

■北原白秋「骨なし児と黒猫」（一九一〇・明治四十三年二月作、
『東京景物詩及其他』一九一三・大正二年七月 東雲堂書店
所収）

そは恐ろしきXなり。淫らにして不倫なる母のごとく、／汝
[な]が神経と知覚とは痛ましきほど慄[わなな]けども、力
なき骨なし児よ。／終日、わづらはしき病室の白葡萄酒の如
き空氣に呼吸し、靈[たましひ]のうつらめ瞳は唯狂はしき
硝子戸の外をうち凝視[みつ]む。（第一連）

そが背後[うしろ]の棚の上、やや青みたる陰影の中、／二
ツケルの産科の器械鷺のごとき嘴[はし]して光り、／薄く
曇れる硝子のなかにとりあつめたる薬剤の罫、／その青く赤
くおぼめける劇薬のエチケツテ[ラベル]……鋭く、苦し。（第
二連）

ああ骨なし児よ。この薄暮[くれがた]の反射に、／柔軟[や
はら]かにして悩ましき汝が衾[ふすま]は銀の潤沢[しめり]
に光れど、／冷やかなる鉄の寝台の上、据ゑられし木造りの
函は、／汝が身を入れたる小さき牢獄[ひとや]は山葵色の
曇りにうち歎く。（第三連）

大人びたる顔の白き白き白粉の恐ろしさよ。／なよなよと凭
せたる身体のしまりなさ。／靈の青さ、いたましき、／生温
るき風のごと骨もなき手は動く―その空に錆銀[しゅうぎん]
の鐘はかかれり。（第四連）

ああ、ああ、今しがたまでぞ、この硝子戸の外には／五時で

るの日の光わかわかしき血のごとくふりそそぎ、見えざる窓下のあたりより、／抑圧「おさ」えあへぬ抱擁の笑ひ声きこえしか―葱畑すでに青し。(第五連)

錆銀の鐘よりは一条の絹薄青く下りて光る。／その端をはづかに取りたる手は、その瞳は、／ああ、すべて力なし。―さらにさらに痛ましきはかかる青き薄暮の激しき官能の刺戟。(第六連)

聴け、遂に、彼は泣く。……／あらず、そは馴染みたる黒猫なりき。ふくらなる身を跳らせて、銀色の衾の裾にのぼりつつ背を高めたる。／黄ばみたる青葱色の眼の光来る夜の恐怖にそそぐ。(第七連)

かくてただ声もなし。青く光る硝子戸に真白なる顔ふりむけて、／哀楽の表情もなく親しげに畜類の眼と並びつつ何をか凝視む。／ああ、暗き暗き葱畑の地平に黄なる月いんとして、／錆銀の鐘は鳴る……幽かに、……幽かに……やるせなき霊の求「と」めもあへぬ郷愁「フスタルチャア」。(第八連)了

明治期の白秋の詩には、病的な神経が繰り返しまれていくが、『東京景物詩 及其他』におさめられたものは、連作「心とその周囲」などにわかりやすく、心理学の影響の色濃いテーマが多い。そして引用した「骨なし児と黒猫」には、はっきりと「知覚」が登場する。

この詩のカギは、冒頭の「そは恐ろしきXなり。」を解き明かすことにあるだろう。「骨なし」とは、「身体軟弱にして之を

抱くに、頭傾き、或は垂れて正しきことを得ず、骨の無きやうに見ゆるゆえ、俗にはねなしと云ふ」(『内科秘録』一八六四年)という症状を指すが、要因は、支持筋の筋力の低下や麻痺を示す疾患(先天性筋無緊張症、進行性筋萎縮症、多発性神経炎など)にある。しかし白秋は、その病んでいるはずの「神経」と「知覚」が「慄(わなな)く」という。この矛盾が「淫らにして不倫なる母の如く」という直喩と対応している。つまり、「母」というイメージにはそぐわないのが「淫ら」「不倫」であるように、「骨なし児」のイメージにはそぐわないものが、病み、麻痺しているはずの「神経」「知覚」が「慄く」ことなのである。それでいて「力なき」状態であることが、何らかの刺激の強さに抵抗できず、またそれが何かも理解できない姿を想像させる。病室の白葡萄酒のような空気を呼吸し、酔わされているような状態で、狂わしいことが存在する硝子戸の外を、それが何かを理解できていないかのような「眸」で見つめているという。さらに連想でいえば、「骨なし児」とは、「古事記」に登場する蛭児を指すともいわれ、イザナギ・イザナミの間にうまれた不具の児のことでもある。第二連に「ニツケルの産科の器械驚のごとき、嘴して光り」とあることから、ここが産科であることが示され、「骨なし児」は、神話のはじまりのモチーフと病的なイメージを孕みつつ、幾重にも「恐ろしきX」となるのだろう。

第二連で描かれた、病室の鋭く、苦いというイメージを受けて、第三連では、薄暮の光の反射するなか、骨なし児がいる室

内が変質していく。夜具は銀色に潤むように光っているのだが、冷たい鉄の寝台、その上の骨なし児が居る木製の函（「小さき牢獄」）は、鋭く、苦い刺激を感じさせる山葵色に曇り、変じていくのである。第四連は木の函のなかの骨なし児が描写されるグロテスクな内容となる。児であるはずが大人びた顔をし、その白い白い白粉が恐ろしいという。身体はなよなよとして、霊は痛ましいほどに青ざめているのだ。第五連では、さらに時が移る。硝子戸の外という外界について、「日の光」も、「抱擁の笑い声」も消え、白秋の詩では性欲を示唆する「葱」の畑がすっかり青くなつたと報告される。第六連で、骨なし児は、「骨もなき手」で、「鍔銀の鐘」の方からおりてくる薄青く光る「一条の絹」をわずかにつかむが、日暮れの薄い青さが「激しき官能の刺戟」となつて、痛ましいのだという。官能という性的な感覚だが、ここではまだ意味をなしていないただの刺激であつて、骨なし児には性的なものとして認識されていないと読むべきだろう。つまり、未知の刺激ゆえの恐ろしさである。これは、次の第七連で、馴染んでいる黒猫があらわれ、その「黄ばみたる青葱色の眼」が、「来る夜の恐怖」を映し出していることと対応する。見慣れたもののなかに、未知なる恐怖が潜んでいるのだ。そして、それまで何も眸に映さなかつた骨なし児の「眼」が、猫という「畜類の眼」と並びながら何かをじっと見ようとするのである。このとき、「ああ、暗き暗き葱畑の地平に黄なる月いんとして」と報告される。まさに激しい刺激が性的な

官能として「知覚」されるときが訪れようとしているのである。最終連で「鍔銀の鐘」の音が幽かにするが、これは骨なし児の「やるせなき霊」が、尋ね求めることもできない「郷愁（ノスタルヂヤ）」を意味するとある。この鐘は、すでに骨なし児のグロテスクな姿が描かれた第四連の末尾に登場していたものである。骨なし児が力なくも手を伸ばしていた鐘は、最終連において悲しくもなつかしい音色を遠く幽かに響かせる。性的官能という「恐ろしきX」は、内に秘めたる鐘、いわば純情の存在を希求させると同時に、それを喪失してしまう嘆きをもまたもたらすのである。

森鷗外の「カズイスチカ」（『三田文学』一九一一・明治四四年二月）に、農民が「破傷風」をその症状から「一枚板」と呼び慣らわすことについて、「生活の印象主義者」でなくては名付けられないと主人公の若い医師が感心するエピソードがあるが、「骨なし」も、印象主義的なネーミングといえる。白秋は、その印象を用いつつも、同時に医学的な要因である「神経」や「知覚」の側からとらえ、性という激しい官能の訪れと、その自覚までのあわいを描き出しているのである。これもまた神経への刺激に対し、従来の経験によつて大脳が作用し「知覚」させるという前提があればこそその表現だろう。ジェームズ（『心理学精義』）は「感覚」と「知覚」との比較において、

一事物に関するの観念が皆該事物の現実なる直接意識（＝感覚）と混交し、茲に吾人は此に命名し、此を分類し、此

を比較し、此に付きて命題を作り、斯くて内向性伝流によりて惹起されたる所有意識が吾人の全生活を通じて次第に纏綿複雑になり行くなり。事物に関する此の如き高等なる意識が一般に知覚と称せられ、而して其の現実存在によりて生ずる素朴的感が感覚と称せらる。

と説明しているが、強い刺激があつても、それが未知のものであるとき、「知覚」はその激しい刺激に打震えるしかないのである。純粹な感覚の経験は成人には難しいとジェームズは指摘しているが、性とは、成熟への過程で未知の刺激としてあらわれるものだといえるのではないだろうか。

■森鷗外「青年」(『昂』一九一〇・明治四三年三月―八月)

又見物の席が明るくなる。ざわざわと、風が林をゆるするやうに、人の話声が聞えて来る。純一は又奥さんの目が自分の方に向いたのを知覚した。

「これからどうなりますの」

「こん度は又二階の下です。もうこん度で、あらかた解決が附いてしまひます」

奥さんに詞を掛けられてから後は、純一は左手の令嬢二人に、鋭い観察の対象にせられたやうに感ずる。令嬢が自分の視野に映じてゐる間は、その令嬢は余所を見てゐるが、正面を向くか、又は少しでも右の方へ向くと、令嬢の視線が矢のやうに飛んで来て、自分の項に中「あた」るの感ずる。見

てゐない所の見える、不愉快な感じである。Y県にゐた時の、中学の理学の教師に、山村といふお爺いさんがゐて、それが Solismas(スピリチズム)に関する、妙な迷信を持つてゐた。其教師が云ふには、人は誰でも体の周囲に特殊な雰囲気有してゐる。それを五官を以てせずして感ずるので、道を背後から歩いて来る友達が誰だといふことは、見返らないでも分かる云つた。純一は五官を以てせずして、背後に受ける視線を感ずるのが、不愉快でならなかつた。(九)

■森鷗外「雁」(『昂』一九一一―一三・明治四四年九月―大正二年五月)

戸を明けようとしていた女が、岡田の下駄の音を聞いて、ふいと格子に掛けた手を停「とど」めて、振り返つて岡田と顔を見合せたのである。

紺縮の単物に、黒繻子と茶献上との腹合せの帯を締めて、織「ほそ」い左の手に手拭やら石鹼「シヤボン」箱やら糠袋やら海綿やらを、細かに編んだ竹の籠に入れたのを懈げに持つて、右の手を格子に掛けた低振り返つた女の姿が、岡田には別に深い印象をも与へなかつた。併し結び立ての銀杏返しの鬘が蟬の羽「は」のやうに薄いのと、鼻の高い、細長い、稍寂しい顔が、どこに加減か額から頬に掛けて少し扁「ひら」たいやうな感じをさせるのが目に留まつた。岡田は只それ丈の刹那の知覚を閱歷したと云ふに過ぎなかつたので、無縁坂を降りてしまふ頃には、もう女の事は綺麗に忘れてゐた。

しかし二日ばかり立ってから、岡田は又無縁坂の方へ向いて出掛けて、例の格子戸の家の近近く来た時、先きの日の湯帰りの女の事が、突然記憶の底から意識の表面に浮き出したので、その家の方を一寸見た。（二）

この二つの鷗外の作品は、「知覚」を描くことがドラマ展開の核となっている典型といえるだろう。「青年」の小泉純一は、自由劇場に「ガブリエル・ボルクマン」を観に行ったとき見知らぬ女性たちの間の空席に着く。それが坂井夫人と二人の令嬢である。幕間で夫人から脚本について問われたことをきっかけに言葉をかわすが、その次の幕間でもまた声をかけられ、二人の令嬢の好奇的にされている気がしている。令嬢たちと目が合っているわけでもないのに、彼女たちの視線を感じてしまうことが不愉快だという。純一自身はその不愉快さを五官によらないゆえの迷信じみたものであることに帰着させているが、これは純一の大脳が他者の視線を生み出していることになるであろう。つまり、夫人の視線を「知覚した」と明確に自覚しそのことを意識するあまり、純一は令嬢たちの視線までも直接確かめていないのに感じるのであり、「知覚した」という意識が、夫人との危険な関係を予感させ、その認識が令嬢たちの不躰な視線として想像されてしまう。ここで純一が不快なもの正体は、「知覚」の意識の自覚をきっかけに妄想してしまう己の自意識なのである。この場面のあと、はじめて根岸の夫人宅を訪れ、恋愛の対象となることのない夫人と肉体関係を持つにいた

ることが、純一の日記のかたちで示される。この出来事の「心理上の分析」を行った純一は、「己はあの奥さんの目の奥の秘密が知りたかったのだ」と、観劇で出会って以来、夫人にとらわれていた理由を「目の奥の秘密」に見いだしている。谷崎の「刺青」と同様、ここでも「目」は、何かを見ているという単純な感覚器官ではなさそうである。心理学的に言えば、夫人の脳が、何を夫人に「知覚」させているか、なにより純一をどのように「知覚」させているのか、が知りたいということであろう。そしてそれは彼女の人生を知りたいという純一の欲望を映すものでもある。こうした純一の関心こそが、夫人の「目」に「奥」を、さらにいえば人間としての内的な深さを感じさせているのである。日記の中で純一は、夫人に対する自身の記憶のありようを考察したりと、自らを知るために、心理学的分析を実践する人物として描かれている。こうした行為は、純一が近代的な青年である証ともいえるが、彼が小説家を目指しているという設定とも不可分なはずである。

一方の「雁」も、岡田という大学生の意識のありようを描いたものと読める小説である。妾として囲われているお玉を岡田が認識する最初の段階で「知覚」、次に「記憶」の言葉が用いられている。岡田がはじめてお玉を見かけたとき、鬢の薄さや顔の平たさだけ、「只それ丈の刹那の知覚を閲歴したと云ふに過ぎなかつた」という。実は作中、お玉の印象は登場人物それぞれに違っており、父親をはじめ、関わりのある男性はすべて

「美人」であると判断しているのだが、お玉と直接関係をもたない者たちは一様に印象が薄い。岡田も例外ではなく、第一印象は平たく薄かったが、再会したとき、最初の「刹那の知覚」が「突然記憶の底から意識の表面に浮き出した」のである。岡田は、お玉との間で繰り返される挨拶や、蛇退治の事件を経て、親しくなることで印象がかわっていく。岡田のなかで、こうした経験が恋愛の意識にまで成長する気配をみせるのであるが、お玉とは対照的に、結局それは自覚されることなく終わってしまう。ストーリーだけを見れば、男女のつかのまの交流にすぎないが、語り手は複雑な心理の諸要素が積み出す世界を描き出そうとしているのである。

■有島武郎「或る女」前編（『有島武郎著作集・第八輯』一九一九・大正八年三月 叢文閣、後編は同年六月刊）

始めての旅客も物慣れた旅客も、抜錨したばかりの船の甲板に立つては、落ち付いた心である事が出来ないやうだつた。跡始末の為に忙しく右往左往する船員の邪魔になりながら、何かなしの興奮にちつとしてはゐられないやうな顔付きをして、乗客は一人残らず甲板に集つて、今まで自分達が側近く見てゐた棧橋の方に目を向けてゐた。葉子もその様子だけはいふと、他の乗客と同じやうに見えた。葉子は他の乗客と同じやうに手欄に寄りかゝつて、静かな春雨のやうに降つてゐる雨の滴に顔をなぶらせながら、波止場の方を眺めてゐたが、

けれどもその眸にはなんにも映つてはゐなかつた。其代り眼と脳との間と覚しいあたりを、親しい人や疎い人が、何か訳もなくせはしさうに現れ出て、銘々一番深い印象を与へるやうな動作をしては消えて行つた。葉子の知覚は半分眠つたやうにぼんやりして注意するともなくその姿に注意をしてゐた。而してこの半睡の状態が破れでもしたら大変な事になると、心の何所かの隅では考へてゐた。その癖、それを物々しく恐れるでもなかつた。身体までが感覺的にしびれるやうな物うさを覚えた。（前編十）

アリウシヤ群島近い高緯度の空気は、九月の末とは思はれぬ程寒く霜を含んでゐた。氣負ひに氣負つた葉子の肉体は然しさして寒いとは思はなかつた。寒いとしてもむしろ快い寒さだつた。もうどんどんと冷えて行く着物の裏に、心臓のはげしい鼓動につれて、乳房が冷たく触れたり離れたりするのが、なやましい氣分を誘ひ出したりした。それに佇んでゐるのに脚が爪先から段々に冷えて行つて、やがて膝から下は知覚を失ひ始めたので、氣分は妙に上ずつて来て、葉子の幼ない時から癖である夢とも現とも知れない音楽的な錯覚に陥つて行つた。五体も心も不思議な熱を覚えながら、一種のリズムの中に揺り動かされるやうになつて行つた。（前編十三）

引用は「或る女」からだだが、前編部分に対応する先行作品が「或る女のグリンプス」（『白樺』一九一三・明治四四年一月—大正二年三月）であり、同内容の箇所に「知覚」が用いられ

ているので、この明治編で扱うことにしたい。

近代文学史上にあらわれたヒロインのなかでも突出して個性的な人物なのが「或る女」の葉子である。明治二〇年代という日本が近代国家としての諸制度を整えていくなかで、葉子は自らの居場所を求め、あるべき生を求める。国民を生かす自由を標榜しつつ、その実管理していくものであった近代国家の諸制度は、目覚めながらも行き場をもとめて彷徨する女の生を波乱に満ちたものにしていく。とりわけ彼女の性の衝動は、交差する男たちを翻弄し、さらには自身さえも翻弄するものである。このことも含め語り手は、全編にわたって彼女の意識を分析的に記すことに注意を払っており、それがそのまま彼女の特質を表現するものになっていると考えられる。

引用した二カ所から、葉子が「感覚」「知覚」が麻痺し「妄覚」（幻覚）に陥りやすい人物であることがうかがえる。一つめの引用は、氣に染まない再婚相手のいるアメリカへと旅立つ船の出航直後のシーンである。葉子は静かに降る雨の中、甲板から波止場を眺めている。だがその「眸」には何も映ってはいなかった。このとき葉子は、日本に残していく人々の印象的な姿を思い浮かべている。これについて語り手は「眼と脳との間と覚しいあたり」で起こっている現象であり、「知覚」は半睡の状態、しかもこの半睡が破れたら「大変な事になる」と葉子自身がうっすらと思っていると説明している。これはまさしく「妄覚」を描いている。これにより身体までも「感覚的」に痺れる物憂さ

を感じているとあるところから、「妄覚」が「感覚的」なものであるというジェームズの指摘を想起させる。葉子は、恋愛結婚から逃げ出した出戻りであるという立場であり、両親の後ろ盾も失って、親戚や残された幼い妹たちの手前、どうしても気に入らない相手のもとへ行かねばならなかった。だが、これを厭う強い念、すなわち激しく動揺する大脳が彼女の「眼」に目の前に実在しない人々の姿を見せているのである。葉子の心配の正体は、行きたくないという思いのままに自分が行動してしまふことであり、それを自分自身に自覚させる「知覚」は眠らせておかねばならない。かくして、この場面は、感覚的刺激によつてではなく、大脳の作用によつて、「知覚」も「感覚」も麻痺させられているという状況を描いているのである。葉子の激しさの表現になっているともいえよう。

次の引用はその航海中の夜の甲板でのシーンである。ここでは、ある「知覚」の後退が、別の「知覚」の錯誤（錯覚）を生み出すプロセスが焦点化されている。この前の章において、お目付役の田川夫人から侮辱され敵意を抱き、いつにもまして神経が過敏になっている葉子の様子が、「神経の抹消が、まるで大風にあつたこずえのやうにざわざわと音がするかとさえ思はれた」と描かれている。その熱を冷まそうと夜の甲板に出ると、北の海の外気が、急激に彼女の体温を奪っていくのである。しかし奪われたのは「感覚」ではなく、「膝から下」の「知覚」だという。いわば身体の輪郭をつくる「知覚」の意識が後

退し、次に大脳が「音楽的な錯覚」を起こしていることになる。これもジェームズのいう、「錯覚」が「感覚」ではなく「知覚」の錯誤であるという認識にそった表現だと理解することができると。「五体も心も不思議な熱を覚え」るのは、まさに大脳がそう「知覚／錯覚」させているからであり、このような状態になる理由に「幼ない時からの癖」とあるのは、「知覚」のプロセスにおいて、大脳の「従来の経験に於いて最も多く反動を喚起したる事物を知覚す」(前掲『心理学精義』)という作用が起るからである。星の光のまたたきも、波の音も、すべて「錯覚」され、「音楽的な夢幻界」へと置換されていくのである。

ここで改稿と心理学の問題を考えておきたい。「或る女」の葉子、すわなち「グリンプス」の田鶴子の「知覚」は、たとえば(十)の傍線部と同箇所を比較すると「田鶴子は半分眠った様な智覚で、夫れを意識しながら、若し其の半睡の状態が破れたら大変だと、格別夫れを恐れるでもなく思案して居た。」と一文は長いが、説明が少なかつた。「或る女」では短文を増やすことで、より分節化して説明しようとしていることがわかる。そこで注目されるのは、文の主体である。「田鶴子は」と「葉子の知覚は」でわかるように、改稿後の「或る女」では「知覚」が文の主となっている。それに伴い「心」「感覚的」という語彙があらわれて、より心理学的に説明されていることがわかる。とくに「意識」と説明していたところを「注意」という意識を分析する用語を採用している。これにより、正常に「知覚」が

統合されず、「注意」が分散しているという意識の状態を捉えているといえよう。そしていずれのバージョンでも「事による」とヒステリーに罹つて居るのではないか知らん」と自らに言わせている。

同様に(十三)の傍線部も見てみたい。二文で構成されている部分だが、一文めはいずれにも存在しており、その文意に変更は無く、田鶴子もまた幼い時から気分が上ずると「夢現のやうな音楽的の錯覚に陥つて行」くとある。しかし「五体と心」が熱に浮かされて行く様を描く二文めは、改稿後に加筆されたものである。先に「事によるとヒステリーに罹つて居るのではないか知らん」とあったことを考え合わせれば、寒さのために膝から下の「知覚」を失ったことが、「錯覚」する状況を生み出しているという説明は、この頃、ヒステリーに起因した知覚脱失が検証されていることも関係するかもしれない(参照 J・シャルコー述、佐藤恒丸訳『神経病臨床講義』一九〇六・明治三十九年 東京医事新誌局)。目覚めてしまったがゆえに彷徨する宿命をたどる女の激しさは、「知覚」を異常にさせるほどの「大脳」の強さとして描かれ、それが女をさらなる個性的な人生へと突き動かしているのである。

明治中期に本格的に紹介され始めた欧米の心理学は、人間の性質、すなわち人性を、生理学・物理学の観点から探求する可能性をもたらしした。それは文学が人情を心理として描こうとす

るレールを用意したことになる。連合心理学も、実験心理学も、意識を媒介させるか否かの違いはあるが、文学のテーマとして「知覚」に注目を集めることにおいて大きな役割を果たしていた。とくにW・ジェームズ以降は、「意識の流れ」として「知覚」を考えるようになることから、より心意発現のプロセスが複雑になっていき、それこそが人物たちの生のありようをうつし出す手法になっている。さらには、同時期に神経衰弱やヒステリーなどの文明病が登場し流行していくことと相まって、鋭敏であることを超えて病的なまでに外界・内界の状況にデリケートに反応する「知覚」のドラマが演出される。そしてこの過剰さこそが、外界・内界を刺激に満ちあふれるものとみなし、それを「知覚する」＝「生きる」個々の人生を描き出す原動力になっているのである。

明治末から大正にかけて、人物たちの個性を表現する方法となった「知覚」だが、無意識という概念や相対性理論の登場により、さらなる転機が訪れるのが大正から昭和初期、とくに第一次世界大戦以後の文学だと考えられる。これについては改めて稿を継ぎたい。

参考文献

佐藤達哉・溝口元編著『通史 日本心理学』（一九九七年 北大路

書房）

惣郷正明・飛田良文編『明治のことは辞典』（一九八六年 東京堂出版）

森岡周「知覚の心理学史」（『認知運動療法研究』第一号 二〇〇一年）

北九州市立大学

文学部紀要

第82号

— 目 次 —

「知覚」の心理学と日本近代文学（明治編）

馬場美佳…………… 1

北九州市立大学文学部
比較文化学科
2013